

子規の従軍——「君が代は足も腕も接木かな」考

新聞「日本」は、近代的ナショナリズムの論調を鮮明にして、政府の条約改正交渉に反対し、新聞紙条例による発行停止処分を何度か受けている。そのさなかの一八九二年九月一日、「君が代も二百十日は荒れにけり」と詠んだ子規の才能に感服した古島一雄は、記者としての採用を決定したという。「君が代は足も腕も接木かな」の句は、自筆稿「寒山落木（明治二八年）四」の「春」の部にありながら、この時期の子規従軍関係作品には登場しない。この句には「予備病院」の詞書があるから戦場で手足を失った兵士を詠んだものだろう。子規の、この時代認識の鮮烈さの背景を探ってみることにした。

日清戦争において、日本から中国、朝鮮、台湾に派遣された従軍記者の全容については、正確な資料が残されていないが、美土路昌一「明治大正史・言論篇」（朝日新聞社、一九三〇年）の調査によれば、六六社、記者一四八人、画家一人、写真師四人であったという。日清戦争最初の従軍記者は、一八九四年六月六日、東学党の乱に派兵した清国に対抗して出兵した日本軍に従軍した「東京朝日」の記者だった。従軍記者の最初の戦死者は「二六新報」の記者で、「時事新報」の号外でも伝えられた（一八九五年二月八日）。その年の二月、樂地本願寺「従軍死亡記者追悼会」で九人の追悼がなされている。

正岡子規が、一八九五年三月、周開の人々の反対を押し切り、病をおして新聞「日本」の特派員として従軍したのはなぜだろうか。その動機として、最初に語られているのは、「陣中日記（二）」の冒頭部分のつぎの一

節であろうか。「（前略）去年水無月の頃より西の方風雲たゞならず（中略）只勝利のしらせ祝捷の酒盛に心開くものから教ならぬ身も市に隠れ得ず何くれとほださるゝ事多きを寧ろ軍隊に従ひて大砲の聲に氣力を養ひ異国の山川に草鞋の跡を残さばやと思ひ立ちて三月の三日といふに東京を出で立ちぬ」とある。「陣中日記」は、「日本」連載の、自作の句や短歌を随所に挿入した従軍記である（四月二八日、五月一日、五月一六日、七月三日）。一九〇〇年になって書き始めたといわれる未完小説「我が病」で、「新聞社に居ながら文学欄を担当して居るがため従軍出来ぬといふのは実に情無い。文学者として千歳一週此戦争を歌ふのも其職務」だが、自分としては他と争うまでの権利はなく、病身なので進んではい出しかねるが「従軍しなければ男に生れた甲斐がない」とまで思いつめている主人公は作者自身であろう。現実には、自ら従軍を願っていたので、二月二八日の新聞社の会議で決定し、三月のひな祭りに同僚たちに見送られ新橋を発っている。

離れもなし男ばかりの桃の酒
畑打よこ、らあたりは打ち残せ

広島に着いた後、正式な従軍許可が下りた三月二七日までの間、松山での墓参りや送別句会を済ませ、従軍は近衛師団と決まり、出航は四月一日であった。三月三〇日には日清休戦条約が調印され、悶々とした日を送る。

日本のほつちり見ゆる霞かな